

短 報

セキュリティを担う者のケア

倉爪真一郎¹⁾

Care of Professionals Responsible for Security

Shinichiro KURATSUME, Master of Jurisprudence¹⁾

〔Abstract〕

Recently, many professionals responsible for security (medical care, military, etc.) have been on the verge of a crisis. The most common crises are death, suicide and depression from overwork. The crisis of the professionals responsible for security is a crisis of people for whom it is necessary to care for and a crisis of our state.

The jobs of professionals responsible for security are characterized by having to deal with "Emergency" responses. They also have long and irregular working hours, as well as a high amount of stress on the job. To avoid the crises of professionals responsible for security, it is necessary to increase labor costs, resolve the shortage in manpower, and improve working conditions. But what is most important is caring for their soul; (1) help them to sleep soundly, (2) allow them to keep their sense of having a calling. Therefore, it is necessary for state, regional society and workplace management to fully evaluate the "public" value of their mission in our society, and to care for them, and to support them totally.

〔Key words〕 security, care, sleep, mission, solidarity

〔要 旨〕

近年、セキュリティを担う職業（医療・介護、軍事等）が危機に瀕している。特に過労死、自殺、うつ病の問題。セキュリティを担う者の危機は、ケアを必要とする人々の危機であり、国家の危機である。

セキュリティを担う職業の特徴は「緊急時」への対処という点にある。それに長時間不規則労働とストレスが加わる。セキュリティを担う職業の危機を回避する道は、人件費アップや人手不足の解消、労働条件の改善はもちろんだが、最も重要なことは彼らの心のケアであろう。(1) 彼らがぐっすり眠れるようにすること、(2) 彼らが使命感を駆動し続けられるようにすること。そのためには、われわれの社会における、彼らの責務の《公的》な価値を十分認識した上で、国家・地域社会・職場のマネジメント全体で彼らをケアし支えていくことが必要である。

〔キーワード〕 セキュリティ、ケア、眠り、使命感、連帯感

I. 序

新自由主義的な小さな政府におけるセキュリティ (security) は、文字通り安全保障 (軍事) と警察である。国家の役割は、個人の生命・自由・財産を守るという最

小限度にとどめ、あとは個人の自由あるいは市場に委ねるべきだとする。社会民主主義的な大きな政府 (福祉国家) におけるセキュリティは、軍事・警察に社会保障 (social security) を加える。国家の責務は、個人が最低限の生活を送れるようにすることである。両者は2つの

1) 聖路加看護大学 非常勤講師 (法学担当) St. Luke's College of Nursing, Part-time Lecturer, Jurisprudence 2009年11月10日 受理

極であって、現実の国家・政府はその間で政策を模索する。

セキュリティの語源的意味は without care である。「(個人が自己自身のことに) 配慮することなしに (済む)」を意味する。それは、個人への配慮をしてくれる別の《主体》がいるということでもある。中世キリスト教社会では神、そしてこの世における神の代理人である教会(聖職者)がその役割を担った。しかしルターが教会の権威を否定し、聖書に帰ることが唱えられたとき、良心(内なる神の声)に耳を傾けるという形で、再び個人が自己の魂と向き合うことになる。他方それまでローマ教会が果たしてきたセキュリティの役割は国家が担うことになる。国家が担うセキュリティとは、国民の生命・自由・財産を守ることである。その流れが現在まで続いているといえよう。

ところで近年、医療現場の崩壊、介護が職業として成り立たない、帰還兵が PTSD で苦しむ、システム・エンジニアが労災になる……という事態が生じている¹⁾。これらはセキュリティを担う人々が、肉体的精神的限界を超えて、場合によっては死に至る(死を選ぶ)ということだ。それはセキュリティを担う職業自体の危機であるが、担い手がいなくなるということは、国家の危機である。セキュリティの担い手がいなくなれば、ケアを必要としている人々は見放されることになる。この人達もまた肉体的精神的な困難に耐え切れず、死に至る(死を選ぶ)ことになってしまう。

このセキュリティの危機は、小さな政府か大きな政府かという政策選択によって解決する問題ではない。われわれがまず認識すべきは、セキュリティを担う人々もまた労働者であるということだ。われわれの多くはこの資本主義社会の中で、自らの労働力を商品として売ることによって賃金を得、いわゆる労働者として生活している。しかし資本主義社会は、セキュリティを担う人々の使命感に応答してくれるわけではない。また彼らの使命感を動機づけてくれるわけでもない。介護のように、セキュリティを担う役割自体が職業として成り立たないという現状もある。

それに加えて、セキュリティを担う人々に限らず、近年の労働問題はうつ病患者の増大、さらには自殺と過労死の増加という死の問題にまで連鎖している。これは単なる《働き過ぎ》の問題ではない。健全ではない形で労働に駆り立てられる現状を分析し、その上でセキュリティを担う人々をケアして、国家的なセキュリティの危機を回避しなければならない。本稿は、近年の労働問題とセキュリティを担う者の危機(ひいてはセキュリティの危機)とを同じ土俵の上で議論するためのささやかな試みである。

Ⅱ. 緊急事態に対処する仕事

医療・介護従事者、警察官、消防隊員、軍人、システム・エンジニア……。彼らには平時には平時の業務があり、緊急時には緊急時の業務が課せられる。休日自宅にいても呼び出されることがある。このような業務につく人々を、本稿では「セキュリティを担う者」と呼ぶことにする。彼らの業務を特徴づけるのは「緊急時の業務」であり、それが平時の業務に加わることで長時間労働を生むことになる。

ここでまず平時と緊急時を区別する必要がある。平時勤務とは、一般企業でいうなら、月曜から金曜までの朝9時から夕方18時(法定労働時間1日8時間)、これを定時とするような勤務である。緊急時勤務とは、第1に休日(土日祝日、休暇、ローテーション明けの休み)に呼び出される場合の勤務、第2に本来《自然》ではない時間帯の勤務(夜間の当直、交替制による不規則な勤務)である。ここで《自然》とは、朝起床し、昼間働き、夜床につくという生活リズムの中で、平時勤務を行うあり方を意味するものとする。

緊急時勤務は、休んでいる時あるいは本来休むべき時、また本来《自然》ではない時間帯に強制される労働である。しかし「セキュリティを担う者」にとって、この緊急時勤務は織り込み済みであって、「強制」という言葉は不適切だといわれるかもしれない。緊急時勤務は誰かが行わねばならぬものであり、それを担うことに使命感を感じ、実際に達成感を得ることで、それがまた駆動力となる。「セキュリティを担う」仕事の魅力とはそういうものであろう。しかしバーンアウトやうつ病、過労死に至るとなれば、もはや仕事に魅力を感じる余力すら失われているといわざるを得ない。原因の一つは、緊急時が常態化していることであろう。夜間勤務、不規則な勤務、休日の呼び出し、それらが平時勤務と切れ目なくつながり、この状況が解消されそうもないという絶望を持つとき、蓄積されたダメージがボディブローのように効いてくる。

松丸正弁護士は医師の宿日直の問題点を次のように指摘する。「(厚生労働省の通達では)宿日直勤務は監視・断続労働であるとして労働時間としてカウントしなくてよいとしています。宿日直勤務が労働時間にカウントされなくてもいいというのは、宿日直勤務時においては、ほとんど、勤務らしい勤務がないという前提なのです。お医者さんの宿日直勤務は、急患、あるいは、入院患者の病状の急変があれば直ちに対応することが求められている時間であって、これは労働時間です。最高裁判所は、警備員の仮眠時間について、労働時間として認めています…。なぜかという、仮眠時間でも警報や電話等があったら直ちに対応しなければいけない時間であり、労働か

らの解放が保障されていないから、それは労働時間ですと、言っているのです。この判決からするなら、勤務医の宿日直時間は仮眠時間中も含めて労働時間です²⁾。

当日直は、「直ちに対応しなければいけない」という意味で仮眠時間も含めて緊急時勤務である。しかしそもそも「労働」とすら看做されていない。国民の生命を守る仕事は「労働」以下の待遇とはどういうことか。医療費抑制政策、勤務医と開業医の所得格差についてはつとに指摘されるが、医療従事者も労働者であること、彼らにとって睡眠がいかなる意味をもつのか、正確な現状分析に基づく対策が急務である³⁾。

看護師の場合も同様である。近年2件の過労死事件がそれを示している。第1は、東京済生会中央病院における24歳看護師の不整脈による死である。三田労働基準監督署は2007年5月これを労災と認定した。その理由は、①月平均80時間近い残業時間、②1日約25時間拘束の当直勤務、③深夜交代制といった不規則な勤務である。ここには緊急時勤務の常態化が典型的に現れている。

第2は、2001年2月13日大阪国立循環器病センターにおける25歳看護師の脳動脈瘤破裂による死である。労災認定は得られなかったが、「公務災害」を認めるよう起こされた行政訴訟で勝訴。大阪地裁は以下の点を認めた。「日勤・深夜、準夜・日勤が日常的に行われ、勤務と勤務の間隔は5時間～6時間未満。通勤時間・食事・入浴など生活上欠かせない家事に要する時間等を考慮すると、確保できる睡眠時間は3ないし4時間程度。そのために、疲労の回復のために十分な量の睡眠を取れず、恒常的な残業などが重なって、疲労が回復することなく蓄積していった」。

日本医労連の大村淑美は、「看護師の限界を超えた過酷な労働」を生み出している政府の医療費抑制政策と、「構造的・政策的につくられた看護師不足」を批判し、看護師の増員と夜勤の法的規制を訴えている。具体的には、①夜勤は3交替を基本に1人月8日以内、②勤務間隔は最低12時間以上とし、夜勤後の時間外労働を禁止、③夜勤・交替制勤務者の労働時間は週32時間以内というものである⁴⁾。

医師や看護師の労働条件改善の試みはすでに始まっている。しかしそれらはあくまでインフラ整備である。問題は実際に「セキュリティを担う者」の生活自体が改善されることである。そこで以下の2点について検討する。第1に、休みを取ることは「ぐっすり眠る」ことに直結するのか、第2に、彼らの使命感と、彼らが労働者として管理されることとは親和するのかということである。

Ⅲ. ぐっすり眠れるようにする

仮に善きマネジメントが行われたとして、休みを取る

ことが「ぐっすり眠る」ことに直結するだろうか。答えはおそらく否であろう。労働者自身が「ぐっすり眠れる」のでなければ、真に労働条件が改善されたとはいえない。特に「セキュリティを担う者」を特徴づけるのは緊急時の業務である。緊急時に対処するためには、他の職業にも増して、「ぐっすり眠る」ことが重要である。

ただし「ぐっすり眠る」ことは、本人の意志によっても如何ともし難い。マネジメントを行う側に労働条件遵守を法的に義務づけることは可能であっても、それが必然的に労働者に熟睡をもたらすわけではない。ストレスをコントロールする方法（瞑想、リラクゼーション）の議論は、本人の意志によっても如何ともし難い「眠り」の代替案を提示しているのかもしれない⁵⁾。しかし「眠り」には心と体の関係以上の、存在論的ともいうべき問題が関わっているように思われる。全体（宇宙）の中で個（自己）の位置を確認する作業、あるいは絶対的存在者と自己の関係を確認する作業。その確認作業の中で、自己の位置を見失うことが「ぐっすり眠る」ことを妨げているのではないか。

マックス・ウェーバー（Max Weber）が『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』において注目したのは、神と職業倫理（労働の道徳的価値）との関係、そして労働を通じて倫理的義務を果たす個人が社会的秩序の中でどう位置づけられるかという問題であった⁶⁾。換言すれば、世俗における労働は、神の命令による個人の禁欲＝修練（Askese）として捉えられた。それが結果的に資本主義発展を導いたというものである。実際に救済されるかどうかは分からないが、世俗で労働に励むことと、神と自己との関係を日々確認することの関係性への着目は、近年の労働問題にも示唆するところが大きい。ウェーバーは「眠り」ではなく覚醒時における労働に注目したが、「眠り」において全体（宇宙）の中で個（自己）の位置を確認する作業、あるいは絶対的存在者と自己の関係を確認する作業は、古代から存在する。

ウパニシャッドは、絶対的存在＝宇宙＝梵と個＝我の2つを根本原理とするが、その中間に睡眠の状態を置き、それをさらに夢に煩わされる夢眠と、夢をも見ない熟睡に分けるといふ⁷⁾。夢眠は覚醒位に通じるが、熟睡は梵我一如に通じる。つまり宇宙と個＝我とが合一する理想状態が、熟睡位において達せられるのである。注目すべきは、個と宇宙の合一、それが熟睡という境位において成立するという思考である。

またミシェル・フーコー（Michel Foucault）は、統治のヘブライズムの源泉を司牧＝羊飼（pastorat）の役割に見るが、その役割の一つが「寝ずの番」（羊が狼に襲われないよう寝ずに見張る）である⁸⁾。これは「眠り」が統治のテーマであることを示す。人々がぐっすり眠れるようにすることは、統治者（司牧）の大きな責務なの

である。

以上の議論では不十分だと承知しているが、「眠り」の問題は、全体的秩序と其中での自己の位置づけ、両者の関係性を抜きにして語るわけにはいかないと思うのである。

IV. 使命感を枯渇させないために——連帯へ

「セキュリティを担う者」の使命感と、彼らが労働者として管理されることとはどう親和するのであろうか。「セキュリティを担う」仕事は緊急時への対処を特徴とする。それは訓練・修練により技術を身につけた者へのみ許される仕事であり、とりわけ生命の救済に関わる。それゆえ彼らを駆動するのは何よりその使命感であろう。

他方「セキュリティを担う者」もまた労働者である。確かに、厳密に管理された中で各々が己の役目を全うする、そのような組織を想像することはできる。しかし使命感と管理は、特に緊急時において、必ずしも親和するものではなからう。休みたくても休めない場合もあれば、強制的に休暇をとらされても、それがかえってストレスになる場合もあろう。

したがって「セキュリティを担う者」の管理とは、一方で「セキュリティを担う者」の使命感を駆動させ続けることであり、他方で彼らを疲弊に至らせ使命感を枯渇させぬようケアすることである。予算（医療費抑制）、人手不足、労働条件改善は確かに根本的な問題であるが、重要なことは「セキュリティを担う者」の《心》の管理である。なぜなら「セキュリティを担う者」の《心》、そして彼らの存在自体が《公的》財産（common good, public good）であり、それを守ることは国家や地域社会にとって《公的》な目的たり得るからである⁹⁾。

「セキュリティを担う者」がいて、彼らを管理・教育する者がいる。他方彼らのケアを受ける者、その家族がいる。確かに前者がケアする側であり、後者はケアされる側である。しかしケアする側に過剰な要求をすれば、結局はケアされる側にしわ寄せがくる。したがってケアされる側の人間も、可能な範囲で、ケアする側の人間が壊れてしまわぬよう「ケア」する必要がある。「セキュリティを担う者」が果たす役割は《公的》財産（公共財）なのだから、それを守るために、われわれは新たな《連帯》の形をつくる必要がある。

従来の《連帯》は自律した個人、自分のことは自分で決められる個人を、基礎単位としていた。換言すれば、他人の助けを借りなければ生きていけない（ケアを必要とする）人々は、連帯の構成単位というより、連帯によって慈愛の対象となる人々であった（かつては連帯の構成単位を成していたこともあるだろう）。しかし人間には、自分のことは自分で決められる人々から、他人の助けを

借りなければ生きていけない（ケアを必要とする）人々まで幅がある。それは言うなれば《自由》の幅である。

われわれ皆もそうであるが、とりわけ「セキュリティを担う者」は、その《自由》の幅に対応しなければならない。緊急事態への対処に加えて、《自由》の度合が多様に異なる一人一人への対応（しかも日々変動する）。さらに「セキュリティを担う」人的資源は有限である。教育にも時間がかかる。われわれはその《公的》財産を享受するだけでなく、それに対して共に責任を負わなければならない。それが具体的にどのような行為になるか未知数ではあるが、筆者はその責任の取り方を「セキュリティを担う者のケア」として考えたい。

価値観が異なれば争いもあるだろうが、だからこそ共通の価値観を模索するのだし、それを土台にして価値観の共有部分を広げていけばよい。われわれは日々新たな《公》を模索している。その一つとして「セキュリティを担う者のケア」を軸とした《連帯》の形を模索していきたいと思う。

【注】

- 1) 以下を参照。岡井崇，川人博，千葉康之，塚田真紀子，松丸正．(2008)．壊れゆく医師たち．東京：岩波書店（岩波ブックレット No. 718）．上野千鶴子，立岩真也．(2009)．労働としてのケア．現代思想．37(2)．38-77．
- 2) 松丸正．(2008)．勤務医の「壊れた労働現場と過労死・過労自殺」．岡井崇他．壊れゆく医師たち．60．東京：岩波書店（岩波ブックレット No. 718）．
- 3) 千葉康之．(2008)．医師は、どのような状態で働いているのか．岡井崇他．壊れゆく医師たち．21-39．東京：岩波書店（岩波ブックレット No. 718）．
- 4) 大村淑美．(2009)．過労死をつくらぬ看護職場の改善．働くもののいのちと健康．40．24-25．看護師過労死事件の引用も本文に拠る。また労働条件改善の試みとして現在、日本看護協会の「ナースのかえる・プロジェクト」、日本医労連の「看護職員確保法・基本方針」の改正運動が行われている。
- 5) 熊野宏明．(2007)．第5章妄想せず編．ストレスに負けない生活——心・身体・脳のセルフケア．163-193．東京：筑摩書房（ちくま新書）．
- 6) M. ウェーバー．(1989)．プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神．大塚久雄訳．東京：岩波書店（岩波文庫）．ルターは当初中世的伝統に従って「世俗的労働は、神の意志によるものだが被造物的で、...それ自身としては道徳とかかわりのないものだとしていた」。ところが後の信仰義認説において、「神に義とされる」ためには「隣人愛の外的な現われ」である「世俗的職業労働こそ」が重要だと唱えるに至る（110）。

他方カルヴァンは、隣人愛は「神の栄光への奉仕でなければなら」ず、何よりもまず *lex naturae*（自然法）によって与えられた職業という任務の遂行のうちに現れるのであり、……われわれを取り巻く社会的秩序の合理的構成に役立つべきものという性格を帯びるようになる」（166）。

7) 辻直四郎. (2007). 本論一六. 睡眠の考察. ウパニ

シャッド. 83-91. 東京：講談社.

8) Foucault, M. (2004). *Sécurité, Territoire, Population* - Cours au Collège de France. 1977-1978. 131-32. Paris : Seuil / Gallimard.

9) 田中千恵子. 「看護師や患者らが安心できる医療現場を」. 医療・介護 CBnews. <https://www.cabrain.net/news/article.do?newsId=19049&freeWordSave=1>[2009.11.01]